琉球処分１３０年を問う シンポジウム・大激論会

5月 24日 (日 午後 1時　那覇市民会館

一般参加者も発言できます！

日　　時　５月２４日(日曜日）午後１時から５時まで
場　　所　那覇市民会館中ホール（５００人収容）
参 加 費　１,０００円（資料代を含む）
基 調 講 演　金城正篤氏（琉球大学名誉教授）「琉球処分を考える」
パネリスト　福地曠昭氏（沖縄人権協会理事長）「大衆運動と琉球処分」
宮城弘岩氏（沖縄大学講師）「４００年の経済支配を問う」
平良勝保氏（琉球歴史研究家）「周縁史から見た島津支配４００年」
後田多敦氏（『うるまネシア』編集員）「〈琉球併合〉を救国運動から考える」
主　　催　「薩摩の琉球支配から４００年・日本国の琉球処分１３０年を問う会」
（会長・金城実、彫刻家）

「世界に変化を望むのであれば、私たち自らがその変化を起こさなければならない」。インド独立の父で「非暴力の抵抗」で知られるマハトマ・ガンジーの言葉です。

「醜さの極致」と表現された沖縄戦を生き抜いてきた住民は「これからの沖縄をどうすればよいのか」と、知念ハイスクール（知念高校）に集り「沖縄建設懇談会」を開催し、活発な議論を展開しています。食糧難で、バスや自家用車もない敗戦直後にもかかわらず、大勢の人々が参加しています。沖縄の人々の生殺与奪の権利を握っている米国琉球民政府のお膝元で、米軍政府の批判も堂々と展開しています。そこには人間として平和で豊かに生きる権利を模索している姿があります。

しかし、私たちは「沖縄建設懇談会」以来、これまで県民が議論する場を持ったことは一度もありません。

ことし２００９年は薩摩の琉球王国支配から４００年、明治政府の琉球処分から１３０年の節目の年です。この年に歴史を正しく学び、学者や研究者を交えて県民が議論する「場」を提供するために結成されたのが「薩摩の琉球支配から４００年・日本国の琉球処分１３０年を問う会」（略称・問う会）です。

現在の沖縄をみると、琉球文化の象徴といわれている首里城は最近建設されたもので、いわば「レプリカ」との指摘もあります。琉球王国時代の文化財はどこにいったのでしょうか。また、自立経済を唱えながらも尖閣油田やガス田の開発による利益について議論されたことがあるでしょうか。復帰後、沖縄は「アジアとの架け橋」と言われながらも、成田や関空のように那覇空港が整備されたでしょうか。「核抜き本土並み」と、日本国の最高指導者である佐藤首相が確約したにもかかわらず、嘉手納弾薬庫の地下には２００発以上の核弾頭が貯蔵されています。それは米軍資料でも明らかになっていますが、敵のミサイル攻撃を迎え撃つパトリオットが最初に配備されたことで、その認識を新たにした方も多いでしょう。

オバマ大統領は核の廃絶を世界に宣言しています。私たちはどう対応すればよいのでしょうか。国連はアイヌと琉球は日本国の先住民として、日本国に勧告しています。アイヌ民族については昨年６月６日、国会でも先住民決議をしております。琉球については何の決議もなく、その動きさえありません。琉球はどうなるのでしょうか。

とにかく、私たちを取り巻く課題は文化、経済、政治など多種多様で、しかも、国策に深く関わっているものが多いのです。この節目の年を活用して県民が議論し、これらの問題を考えていきたいものです。

今回の第２回目は「琉球処分１３０年を問う」をテーマに、上記のとおりシンポジウム・大激論会を行います。そこで多くの県民のご参加を呼びかける次第です。